

2013～14年度国際ロータリー第2700地区地区大会

指導者研修会「ロータリーの変化に対して」

第一部

「魅力あるロータリーに」

地区ロータリー情報委員会元委員長 富田英壽（甘木RC）

最近ロータリーが変化して来てロータリーの基本が見失われ、ロータリーの魅力が減っているように感じます。

ロータリーががどのように変化しているのでしょうか。

ところで、ロータリーの根本は「Fellowship」（親睦・友情）と「Service」（サーヴィス）の2つであります。

まず、ロータリーの根本の1つ「Fellowship」（親睦・友情）の面から、どのようにロータリーが変わって来ているかを考えてみます。

まず、あれほど長い間守ってきた、そしてロータリーの特徴でもあった「1業種1会員制」が崩れてきました。この「1業種1会員制」は、長い間ロータリーの大原則になっておりました。もともと、ポール・ハリス（Paul P. Harris）自身の思索の中から生まれ出たものであります。職業人が資本主義社会の激しい自由競争のもと、互い相競う中で、親睦、和合を達成させるということは、どのようにしたら可能であるのか。この難問を見事に解決したのが、1つの職種から、1人しか会員を採らないという発想であります。そうすれば、同業者がいないので、疑心暗鬼の気持ちに陥ることなく、親睦、和合が達成されるというわけであります。このようにして、「1業種1会員制」の原則は、あらゆるロータリーの原則のうち、最近まで、その大原則をなしてきたのであります。

しかし、この大原則が、約10数年前に打ち破られました。その理由はわかりません。しかし、この「1業種1会員制」の大原則は、是非、守られていくべきであるとする意見も、多く聞かれるところでもあります。

また、サイバークラブ、すなわちインターネットクラブなるものが考え出されまして、それが地区で2クラブまで認められていました。これが2014～15年度から制限が無くなり、いくらでも作れるようになりました。これも会員を少しでも増やそうとするRIの考えからでしょうか。例会で顔を合わせないで、心からの友情を深められるのでしょうか。Face to Faceの例会出席が、基本中の基本でしたが、これも崩れかかっています。

また、メイクアップの期間が1週間から2週間に長くなり、例会休日が年に4回と多くなりました。これも例会の軽視でありましょう。

さらに、今年度から大変なことが決まりました。仕事をしたことがない人、また仕事を中断している人を正会員として認めることになりました。職業人の集まりでありましたロータリーに、専業主婦も入会を認めるようになったわけです。

それに、次年度から衛星クラブなるものが考えられました。

RI 理事会は、最近の規定審議会に、法人会や準会員などを創るような立法案を提出し、会員増強を企てています。

さて、ロータリーのもう1つの根本である「Service」（奉仕）の面からロータリーの変化を考えてみます。

ロータリーは、職業サービスを根幹とするということで、今まで大切にされてきました。しかし、昨今職業サービスが軽視されているのにも気がなります。その証拠に、決議23～34号を「手続き要覧」から削除しようと、RIで図られたことがありました。この決議は、RI主導の企画活動に邪魔になるからであろうと推察されます。RI主導の企画活動は、ロータリーの基本である決議23～34号を逸脱したものであります。幸い日本のRI理事さん方の懸命なる努力で削除を免れたそうです。

次に慈善奉仕活動に、重きが置かれて来ているように感じます。RIの考え方が、人道的奉仕、慈善的奉仕への傾注のため、資金を多く集めたいためでしょうか、会員増強に一所懸命になっているように思います。会員を増やして資金を増強していきたいのでありましょか。

会員を増強することによって資金を増やし、ロータリーの活動費を多くしていく必要があるとは考えます。とはいえ、誰でも彼でも入会させていくわけにはいきません。ロータリーの誇りと魅力が失われていきそうです。メンバーの質の面からも、「入りたいロータリークラブ」、「入れてもらいたいロータリークラブ」にしていきたいものです。

以上のような変化によってロータリーの基本が失われていると感じます。

ところで、先進国では会員の減少が続いておりますが、どのような原因があるのでしょうか。その減少の原因の1つは、時代そのものが変わって来ているからと考えられます。

時代の変化の1つには、経済環境の悪化、不況でしょう。最近までは、大変な円高で輸出企業は大変でした。昨今では、ギリシャの財政破綻に発する金融危機が起こっております。日本に大部影響が来ました。最近ではアベノミクスの経済効果が現れてきて、経済状況が少し好転してきているようですが。

2つは経済構造の変化であります。大規模小売業の台頭や製造業の空洞化などの経済活動変化です。

3つはITなどの新産業が出てきたことでしょう。よく言われるのは、IT関係をはじめ多くの仕事がグローバル化して、世界を飛び回って仕事をする若い人たちが多くなって、現状のようなロータリーの例会に出席するような時間的余裕がないというわけで、サイバークラブも考えられたようです。

このような時代に対応したロータリーにもしていかなければなりません。ポール・ハリスも「この世界は絶えず変化している。だから我々は世界と共に変化することに用意しなければならない」と言っています。ですので時代にあった、多様化したロータリーが必要になってきます。これらの時代の変化や経済状況の変化によっても、先進国ではロータリーの会員減少が起きているように思います。

しかし、最近の先進国における会員減少は、時代の変化、経済状況の変化だけが原因ではないと思います。それはR Iの考え方の変化によりまして、ロータリーの基本が失われ、ロータリーの魅力が失われてきているからのようです。その魅力が少なくなってきたため、先進国では入会者が減少し、退会者が増え会員減少が続いていることも考えられます。

では、ロータリーの魅力とはどんなものでしょうか。「魅力」とは、人の心を引きける力であります。ですから、「魅力あるロータリー」とは、人を引きつけ、興味を持たせ、喜びを与え、刺激を与えるロータリーということになります。

そこで、ロータリーの魅力について具体的に考えてみるに、一体それは何でしょう。ロータリーの魅力とは、「ロータリーに入りたい」「ロータリーに入れてもらいたい」と感じるものでありましょう。既にロータリーに入っておられる人たちには、ロータリーに引きつけるものがあって、何時までも在籍したいと思わせ、止めたくないと思うことでしょう。

ところで、ロータリーの第1の魅力は、ロータリーの根本の1つである「Fellowship（親睦・友情）」にあると思います。

さて、種々の原因で退会をと思うところを、退会を踏みとどまらせたのは何だったのか、「引き留めたロータリーの魅力」について1998年8月号に掲載された15名の会員の声を調べてみました。We Serveの社会奉仕に充実感を覚え、奉仕のあとの余韻に魅力を感じたという人が4名でありました。一方、Fellowship（親睦・友情）に魅力を感じて、退会を思いとどまった人が11名で圧倒的に多いのであります。このことから多くのロータリアンは、ロータリーの魅力は「Fellowship」にあると考えています。しかし、今、ロータリーの基本が失われ、魅力が失われつつあります。

ロータリーはそもそも、1905年、ポール・ハリスら4人が集まって、親睦、友人作りと相互扶助を目的に作ったもので、すなわち、「Fellowship」から始まったのであります。その後、利己的な目的だけではいけないと、サーヴィス、すなわち「人を思いやり、人の役に立つように」しなければいけないと、サーヴィスの概念が後から入ってきたわけです。

親睦と親睦活動を混同する人が多いですが、親睦というとゴルフなどの趣味の会をしたり、飲み会をしたりと考えがちです。それは、本来の親睦ではなく親睦活動ですが、この種の親睦活動は、これはこれで意義あるものと考えますが、こればかりに耽ってはいけません。

ロータリーで大事な親睦とは、ロータリーの例会や活動の中で、地域の色々な職業のリーダーである人たち、立派な尊敬する異業種の方々とふれ合う中で、自分の教養を高め、人格を高めていき、立派な職業人となっていくことでしょう。自分の職業倫理性を高め、その職業によって人のために、社会のために役に立つことを学び地域の良き指導者として育てていくのです。Fellowship（親睦）の中から、職業サーヴィス（Vocational Service）を学んでいくことになります。

アーサー・フレデリック・シェルドン (Arthur Frederick Shelon) は、次のように  
言っております。「自分の幸せは、自分の周りにいる人びとの幸せと、決して無関係で  
はない。良質の職業人とは、自己改善を重ねて自分の職場を健全に守ると共に、取引先  
・下請け業者・従業員・顧客など、自分の事業と関係を持つすべての人に幸せをもたら  
すことである。そして、その心を持って事業を営めば、必ず最高の利益が得られるこ  
とを自分の職場で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域全体の職業人に伝  
えていって、自分が属する業界全体の倫理基準を高める」というシェルドンの職業サー  
ヴィス理念に基づいた日常の職業生活のことを、ロータリーでは、本来の「サービス  
(奉仕)」としてしているのです。それから社会サービス (Community Service) がど  
んなものか学ぶことになるのです。さらにクラブサービスを、青少年サービスや世  
界サービスを学んでいくこととなります。「入りて学び、出でて奉仕せよ」という言  
葉があります。これらロータリー5大サービスの精神を広め、推奨し、実践していく  
ことがロータリーの目的であります。

ロータリーの心をたいせつにするということは、このFellowshipの心とServiceの心  
を、大切にすることであろうと思います。その根底に寛容、思いやり、親切、謙虚とい  
うものを大事にするということでありましょう。

Fellowshipの心を大切にすることとは、例会を大事にするということでありま  
す。奉仕の心を形成するのが例会です。異業種交流の中で友情を深め、自分自身を高めてい  
きます。ガイ・ガンディカー (Guy Gundaker) は、「例会に参加することによって、自  
己の限界を自覚し、もって転機を得せしめる運動がロータリー運動である」と言ってい  
ます。

ところで、Service (サービス) について考えてみます。

Serviceとは、「人を思いやり、人の役に立つこと」であります。

ポール・ハリスは、親睦、友達作り、助け合いを目的にロータリーを創設し、その後、  
利己的な目的だけではいけないと、サービス、すなわち「人を思いやり、人の役に立  
つように」しなければいけないとサービスの概念が入ってきます。その後、社会サー  
ヴィスか職業サービスか、個人サービスか団体サービスかの思想の対立が起こり、  
あの決議23～34号となるわけです。この決議でロータリーの奉仕哲学が、規定され、  
利己と利他との調和をどのように取っていくかに奉仕の哲学がおかれまして。利己と利  
他との調和を考えて、行動しなければならないというわけです。「Service Above Self」  
(超我の奉仕) (サービス第1、自己第2) という奉仕理念が定められ、「最もよく  
サービスする者が、最も多く報われる」が実施理念とされたのであります。

ですので「サービスの心」を大切にすることとは、「Service Above Self」  
と「One Profits Most Who Serves Best」の、2つのロータリーのサービス理念を、  
大事にして行くことでありましょう。ロータリーはどんなに時代が変わっても、「決議  
23～34の決議の世界」を逸脱することは許されないのではないのでしょうか。

ところで、私たちは、ロータリーに入会したころ、よく「ロータリーはI Serveで、

ライオンズはWe Serveだ」と、よく先輩方から説明されたものです。

すなわち、ロータリーは個人奉仕が主体で、ライオンズは団体奉仕が主体であるということであったと思います。確かに「ロータリーの目的」も、文章を見てみますと、主語は単数であります。また、ロータリーにおけるサービスの2つのモットー「Service Above Self」と「One Profits Most Who Serves Best」も、主語は単数であります。

ですので、1人ひとりが自分で奉仕するのです。それに、色んなロータリーのサービスの中でも、職業サービス、すなわち個人サービスが主体であると思います。この職業サービスはロータリーの独自性のもので、他の奉仕団体では見られないものです。このようなことからロータリーは「I serve」だと言われてきたのでありましょう。しかし、ロータリーの規約や公式の文書などには、はっきりと「I Serve」という言葉はどこにも見あたりません。

ところが、ライオンズクラブ国際会則には「本協会のモットーは、We Serveである」とはっきり「We Serve」という英語で規定されております。

このようなわけで、ロータリーは「I Serve」、ライオンズは「We Serve」と言われてきたのでありましょう。

決議23～34号には、「クラブがひと固まりとなって行動するだけでたりるような事業よりも、広くすべてのロータリアンの個々の力を動員するもののほうが、ロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブ会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験台としてのみこれを見るべきであるからである」と「I Serve」がロータリーの精神に合っているとされています。ロータリーは、もともと歴史的に個人サービス（I Serve）を大事にしてきました。

サービスの実践に当たっては、理念的には個人サービスの精神をもって、その目的や事例により、どちらが効果的かを考えサービスの方法を選んで個人サービスでやったり、団体サービスでやったりすれば良いのでしょうか。サービスの理念（Ideal of Service）に合致すれば、その方法は、それぞれのロータリアンやクラブの考えでやれば良いのではないのでしょうか。

さて、ロータリーの魅力を取り戻すためにはどうした良いのでしょうか。

それは、ロータリーの基本に戻ることはないのでしょうか。

以上のことから、「魅力あるロータリーに」するためには、次の3つのことを大事にして行きたいものです。

第1にFellowship（親睦・友情）を大事にすることです。

そのためには例会を大事に、それによって自己啓発ができ、したがって家庭、職場、地域に役に立ち、そうなれば職業の倫理性向上につながり、社会に、世の中に役に立つこととなります。ですので、例会の回数、1業種1会員制の堅持、質の良い会員の入会、資金集めのための会員増強の阻止、職業分類の堅持などを検討することが大事となります。これらのほとんどがクラブの意向でFellowshipを大事にする方向に運用できるもの

であります。

第2に、ロータリークラブの活動は、クラブが自主性を持つことでもあります。決議23～34号にあるように、RIとクラブの役目をはっきりさせて考えなければなりません。ロータリー運動の中心は、国際ロータリーではなく、クラブとロータリアンであることを良く認識して、クラブとロータリアンは、ロータリーの基本を守っていくことが大事であろうと思います。

第3に、「ロータリーの目的」を良く理解し、推進することでもあります。

以上の3つのことを魅力あるロータリーにするために、大事にして行きたいものです。

さて、ロータリーの最終の目的は、世界平和です。戦争のない世界を造ることです。それは世界の良識ある職業人が、一人でも多く親しい友人になり、ネットワークを作り、すなわち国際親善によって戦争を無くそうと願っているものです。

その根本がロータリーの「Fellowship（親睦・友情）」であります。

（おわり）